

## 高い専門性、そして何よりも患者さんに 「来てよかった」と思われる整形外来を目指して

4月より整形外科部長に早稲田明生医師が就任いたしました。18年度の整形外科の紹介件数は2705件と、当院で最も多くのご紹介をいただいている当科。新体制においても専門性の確立と患者さんに満足いただける治療を行ってきたいと話します。

「手外科、脊椎、膝、股関節、足というそれぞれの専門性は高く保ちながら、どんな患者さんにも“来てよかった”と思われる診療科にしたいと思っています。多くの患者さんを診ながらも、待たされたという思いを持たれることなく、満足

して帰っていただけるようなホスピタリティの高い外来—特に緊急性の高い予約外の患者さんが来た時こそ、診療チームとしての真価が問われるのではと考えます」。

そのためには、働くスタッフのモチベーションを保つための環境づくりが第一と語ります。「まず上が、すなわち私が変わらねばと。スタッフの意見をしっかりと引き出し、全員が整形外科の運営に関わっているという意識を高めたい」と早稲田部長。

### 貴重な 開業医の先生方のご意見

地域連携の点においては「開業医の先生のご意見は患者さん視点であり、これから多くのご意見を頂きたいです。整形外科カンファレンスのほかにも、直接ご意見をうかがえる場をつくり、これまでご紹介を頂いていない先生方にも当科の強みをお伝えしていきたいです。

病診連携はもちろんのこと、顔の見える病診連携も進めたいですね。急性期病



●前列左より 森山一郎【医長・膝関節センター長】、河野亨【副院長・脊椎センター長】、田崎憲一【名誉理事長・手外科センター顧問】  
早稲田明生【部長・足の診断・治療センター長】、岡崎真人【手外科センター長・リハビリテーション科部長】  
●後列左より 山崎舜【初期臨床研修医】、福田良嗣【股関節】、大門憲史【脊椎】、丹下仁志【一般】、加藤知行【手】、坂本徹夫【一般】

院同士、また療養型やリハビリテーション病院とも連携を密接にし、患者さんが病院間を行き来しやすいうように図っていききたいと考えます。

いい治療をしても患者さんが満足されなければ、いい医療にはなりません。整形外科にはスポーツ外傷から高齢者の骨折まで様々な症状の方が受診されますが、患者さん個々の望むゴールをしっかりと見据えながら、満足いただける治療を行っていききたいと思えます」。



早稲田 明生  
整形外科部長 足の診断・治療センター長  
(わせた あけお)

1989年産業医科大学医学部卒業。慶應義塾大学整形外科、日仏整形外科学会交換研修等を経て、2012年に着任。専門は(足)。日本整形外科学会整形外科専門医。日本足の外科学会評議員。

## 「医師の働き方改革推進」についての講演を行いました

当院では10年から「医師事務作業補助者（メディカルアシスタント・MA）」を導入し、医師が事務業務に時間を取られることなく診療に集中できるよう『タスクシフト・タスクシェア』に取り組んでまいりました。現在は40名前後のMAが、医師の外来診療につきカルテの代行入力を行ったり、診療情報提供書や診断書のベースを作成しています。

この取り組みについて「東京都医療勤

務環境改善セミナー」「富士通フォーラム2019」で講演する機会がありました。MA導入の経緯や教育、医師の業務の軽減効果についてお伝えいたしました。働き方改革法案の施行により24年より医師の残業時間に上限が課されます。医師が疲弊することなくベストな状態で患者さんの診療が行えるよう、今後も病院全体で業務改善に取り組んでまいります。

3月18日  
東京都 医療勤務環境改善  
セミナー

医師事務作業補助者の活用による医師の業務改善例  
～医療法人財団荻窪病院の取り組み～

理事長 病院長 外科部長  
村井 信二



5月16日  
富士通フォーラム 2019

病院スタッフ間のタスクシェアで「働き方改革」を推進  
～本来業務に集中できる環境が業務効率をアップする～

副院長 循環器内科部長  
石井 康宏



医師の診療をサポートするメディカルアシスタント室スタッフ

## 整形外科・大門憲史医師が 日本脊椎椎病学会奨励賞を受賞しました

整形外科・脊椎センターの大門憲史医師が第48回日本脊椎椎病学会学術集会にて、「A 20-Year Prospective Longitudinal Study of Degeneration of the Cervical Spine in a Volunteer Cohort Assessed Using MRI Follow-up of a Cross-Sectional Study」の論文で、日本脊椎椎病学会奨励賞第31回（大正アワード）を受賞しました。日本脊椎椎病学会は脊椎椎病分野では最大の歴史ある学会です。

本論文は、健常者193名を対象に、20年前と今回新たに撮像した頸椎MRI画像上の変化を調査し、健常者における20年間の頸椎の加齢性変化を明らかにしたものです。20年間では95%の被験者に何らかの画像上の頸椎の加齢性変化がみられることや、年齢層ごとの変性変化の特徴などを示しました。またMRI上の加齢性変化が必ずしも頸部痛や肩こりなどの臨床症状の発現と関連しないことも本研究によって明らかにされました。

健常者における頸椎の20年という長期間の縦断的研究は世界的にも報告はなく、本報告では、頸椎疾患の治療方針決定や頸椎手術後の長期の経過観察を行う上で重要なデータとなりうる点が高く評価され、17年の国際頸椎学会のベストポスターアワードに続く2度目の受賞となります。

整形外科・脊椎センター  
大門 憲史 (だいもん けんし)  
2009年慶應義塾大学医学部卒業  
日本整形外科学会専門医

